

## 未来ノート

-202Xの君へ-

## フィギュアスケート

みや はら さと こ

## 宮原知子

白いスケート靴

師匠との出会い

何事も一生懸命

コツコツ北京へ

## 米国 4歳は1人で滑った

あのとき、小さな白い靴に出会わなければ、宮原知子（関大・木下グループ）というスケーターは生まれなかったかもしれない。

4歳のころ、両親の仕事の関係で住んでいた米テキサス州で、初めて氷の上に立った。近所のショッピングモールにあったリンクで多くの子供たちが滑っているのを見て、「滑ってみよう」。スケート教室に入っ

た。

リンクの貸し靴は赤か黒色。宮原は赤い靴をはきたがったが、足に合ったサイズがなかった。大きめのサイズは赤をはこうとしたが、教室の先生に「ピタリした靴をはきなさい」と言われた。でも、黒はど

まりでした」

白い靴でレッスンに参加した宮原は集団の輪に入らず、1人で滑った。英語や外国人とのコミュニケーションになじまず、他人と同じことをするのが苦手だった。裕子さんは「何回言っても協調性がない。迷惑もかける」。せつかく靴を買ったのに、約2カ月でやめてしまった。

そんなある日、裕子さんが日本にいる自身の父に電話で言われた。「もったいない。ちゃんと続けていた

ら真央ちゃん（浅田真央）

みたいになつたかもしれないで」。裕子さんが「もう1回やる？」と聞くと、宮原は「やりたい」と即答。靴は持っていたので、次は週1回15分の個人レッスンを受けることになった。

週1回では滑り足りない。毎日のようにリンクに通った。新体操、バレエも習っていたが、裕子さんいわく「スケートは吸いつくように好きになった」。宮原は「あまり覚えていないけど、1人で滑れたときのうれしさがとても大きかった」と振り返る。

6歳の終わり、日本に帰ることが決まった。「スケートは続けたい」。白い靴を持って、京都府の自宅近くにあった醍醐クラブへ向かった。

白い靴をはいた幼少期の宮原知子。母の裕子さん提供



平昌五輪から帰国後、関大の学長からサプライズの金メダルをもらった宮原知子

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA（朝日新聞販売所）でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。